

## 「システム開発方法論への科学的アプローチ」研究会

### 設置申請書

2018年2月20日

1. 研究会名

「システム開発方法論への科学的アプローチ」研究会

2. 研究会テーマ

AI、IoT、人型ロボットなど、新たなIT動向が世間をにぎわせているが、「人間のための情報システム」をどのように構築すべきかという観点でいえば、我々は大きな課題に直面しているといえる。長く親しんできたシステム開発方法論を見直す機会の到来である。変化する現象の中に普遍的な構造や法則を見出すことができれば、奔流を突き進む航海を約束する方法論の構築が期待できる。本研究会では、こうした課題意識に立ち、「科学」の観点を武器とするアプローチによる新たなシステム開発方法論の可能性を探究する。

3. 主査氏名、所属、連絡先

氏名 中西昌武

所属 名古屋経済大学 経営学部 教授 ph.D

連絡先 nakaniishi-m■nagoya-ku.ac.jp

(■を@に、全角文字を半角文字に置き換えてください。以下、同じ)

4. 幹事氏名、所属、連絡先

氏名 松平和也 (学会監事、ph.D)

所属 株式会社プライド

氏名 北村充晴 (会員、ph.D)

所属 株式会社プライド

氏名 小久保幹紀 (会員)

所属 株式会社システムフロンティア

5. 研究会テーマ設置の趣旨

AI、IoT、人型ロボットなど、新たなIT動向が世間をにぎわせているが、「人間のための情報システム」をどのように構築すべきかという観点でいえば、我々は大きな課

題に直面しているといえる。長く親しんできたシステム開発方法論を見直す機会の到来である。ただし経験則のみに頼る方法論の見直しは、激変する IT の波に呑み込まれ翻弄されるだけだろう。変化する現象の中に普遍的な構造や法則を見出すことができれば、奔流を突き進む航海を約束する方法論の構築が期待できる。それは「科学」の息吹を入れられた方法論と呼ぶべきものとなる。

システム開発方法論は、論理的整合性と情緒的不合理性と打算的利害性が錯綜する総合技術の工程であり、理論的整備という面では未踏の地のまま新時代を迎えてしまった。複雑で多様な活動局面を抱えており、手法ひとつで鮮やかに問題解決できる領域では決してないが、新たな IT 動向に直面する今、改めて、科学化という観点で可能性を探究したい。

本研究会では、こうした課題意識に立ち、「科学」の観点を武具とするアプローチによる新たなシステム開発方法論の可能性を探究する。

「科学」の息吹を入れられたシステム開発方法論は、若い世代の方々に光明を与えることになるので、ぜひその夢を若い世代の方々と分かち合っていきたい。この研究会活動を通して若い世代の研究者が育つ機会ともしたいと願っている。

なお、2015 年から 2017 年度まで実施した「超上流工程における要求分析への科学的アプローチ」研究会では、理論の裏づけに乏しく経験やスキル頼みで技芸色の強い要求分析プロセスに焦点をあて、科学的探究の目で救い上げる可能性について探究した。毎回、科学的なアプローチの取り組み事例を取り上げ、適用可能性について活発に議論し、このアプローチへの期待を共有してきた。最終回では、要求分析のエンジニアリング・ツールとしてパッケージ化に成功した GUTSY-4 開発者のお話を伺い、システム開発方法論そのものの科学化への期待を膨らませることも出来た。この経験も、本研究会を新たに申請する動機となった点を付言する。

## 6. 主たる活動場所

株式会社プライドの施設をお借りする予定である。

## 7. 活動計画

活動は以下の内容とし、必要に応じて外部講師を頼むことも視野に入れる。

- ① 情報要求プロセスが長年抱えている技術的課題について議論する。
- ② 最近提案されている手法などについて、理論的観点から批判的に検討する。
- ③ 情報要求プロセスへの科学的アプローチに、どのようなものがあるか議論する。
- ④ 申請者が提案する「パス歩行行列による帳票検討プロセス」の可能性を議論する。  
(試作された支援ソフトウェアを確認しての議論も含む。)
- ⑤ 以上を踏まえ、要求分析プロセスへの科学的アプローチの確立方法を議論する。
- ⑥ 研究活動の成果を、毎回、大会で発表する。